

The Decay of Lying における Wilde の “imagination”

大 曲 陽 子
(明星大学講師)

これまでも、Wilde の評論集 *Intentions* に収録される *The Decay of Lying* をとりあげ、“lying”「嘘をつくこと」について考察したことがあった。Wilde は論中で、最近の文学作品には、「芸術」「科学」「社交の楽しみ」としての、「嘘をつくこと」がすっかり衰退してしまい、美しくもない「現実」を描くことばかりに夢中で、「美しい嘘をつく」ことによって「真実」を語るという、芸術の本質が見失われてしまっていることを嘆いている。そして、「嘘をつくこと」、つまり美しい事実でないものを語ることをこそ「芸術」本来の目的である、(Lying, the telling of beautiful untrue thing, is the proper aim of art.) とはっきりと語る。Wilde の言う「嘘をつくこと」は「芸術」と同義語であるわけだが、Wilde がこの作品において他の同義語として「詩」(poetry)、「仮面」(mask)、「架空」(unreal, non-existent, fiction)、「誇張」(exaggeration)、「空想」(fancy)、「ロマンス」(romance)、「美」(beauty)、「そして「想像力」(imagination) を挙げていることを思い返し、その中で最も注目されるべき “imagination” に、少しばかり焦点をあててみようと思う。

『獄中記』の中で Wilde はキリストと芸術家を同一視し、両者の根底にある共通のものは「激しい炎のような想像力」(an intense and flamelike imagination) であると語る。自分自身を含めて、芸術家の根底に不可欠なものは “imagination” であると繰り返す Wilde にとって、つまりこの “imagination” の欠如こそ最も嫌悪し、憂えるべき問題であることは確かである。同じく、恋人 Bosie を責める件では、

“君の性格における本当に致命的な欠陥、すなわち

完全なる想像力の欠如” であるとか、

“君は何という卑しい、枯渇した、

想像力に欠けた人生を送ったことになるだろう。”

というように、特に想像力の欠如を責める言葉で、自己の失望感を表現している。

The Decay of Lying で Wilde は、冒頭からいきなり「自然」を批判することで、我々の目を覚まさせる。これは当時の実利主義的社会背景が原因となって、一般市民社会

の生活のみならず、芸術の世界にまで「事実崇拜」が根を下ろしてしまっていることへの警鐘である。ここでも Wilde はこう語る。

“「自然」の持つ無限の多様性は、それは「自然」そのものの中にあるのではない。
「自然」を見つめる人間の
「想像力」の中に存在するのだ。”

Wilde の “imagination” への深い思い入れは、“imagination” 無用の “realism” との闘いでもあったのだ。「嘘をつくこと」には、豊かな “imagination” が必要である。“imagination” を駆使しなければ、自然を、絵画などの芸術に変えることはできない。「事実崇拜」の赴くまま、有りのままの現実生活を描き出したところで、文学を、芸術作品という高みに引き上げることはできないのだ。Wilde は、「嘘をつくこと」という芸術を復活させることは、我々の義務である (our duty) とまで言い切っている。

『芸術』が、“imagination” という媒体を放棄するとき、それはすべてを放棄するのだ。」とまで Wilde に言わしめたこの “imagination” は、まさに Wilde の魂そのものであり、彼の創作活動においてのみならず、実人生においてさえ、生きる源泉であったことは、忘れてはならない核心の一つであろう。

